

同窓会会報 憩の仲間 第5号

2025年（令和7年）11月1日
発行
天理大学ふるさと会 医療学部会



「ふるさと会館」は、ふるさと会会員の多額な寄付により2004年に竣工し、「**天理大学9号棟**」と称し、多くの行事で活用されています。一階はふるさと会事務所、会議室として使用されています。

天理大学 ふるさと会館

持続可能な医療学部会の活動を・・・

天理大学ふるさと会 副会長 兼 医療学部会長 市村 輝義（医技校2期）

今年の夏は、例年を凌ぐ猛暑が続き、記録的な暑さが次々と更新される、近年まれに見る厳しい夏となりました。平素より「天理大学ふるさと会」ならびに「医療学部会」の活動にご理解とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

ご存じのとおり、天理大学創立100周年事業の一環として、天理医療大学は天理大学医療学部へと移管され、早くも2年半が経過しました。これに先立ち、旧「天理看護学院同窓会」「天理医学技術学校同窓会」「天理医療大学同窓会」は統合され、2021年（令和3年）10月に『天理よろづ相談所学園同窓会』として発足しました。その後、大学の移管に伴い、2023年（令和5年）4月より『天理大学ふるさと会（同窓会）』に加入し、同時に学域部会の一つとして『医療学部会』としての活動を再開いたしました。

この数年間の急速な変革により、医療学部会会員の皆様には多くの混乱とご不便をおかけしましたこと、心よりお詫び申し上げます。特に、3同窓会が統合された『天理よろづ相談所学園同窓会』としての活動期間がわずか2年間で短く、さらに新型コロナウイルスの流行とも重なったことで、十分な周知が叶わぬまま「ふるさと会」への加入に至った経緯がございます。

現在（2025年10月時点）、連絡可能な同窓会員数は3,421名（総卒業生5,174名）です。今年5月に実施した2025年度医療学部会総会では、電磁的議決権行使の形式を採用し、210名の会員から回答をいただきました。これは連絡可能な会員の6.14%に相当します。この結果から、同窓会への関心の低さに驚きと戸惑いを覚えました。活発な同窓会活動を展開するためには何が必要なのでしょう。

天理大学ふるさと会

医療学部会



まず重要なのは、同窓会の意義や存在価値をどれだけ理解・認識していただけるかです。そのためには、同窓会の活動内容や目的を積極的にPRし、広報を活性化させる必要があります。幸い、近年ではパソコンやスマートフォンが日常的に活用されており、情報発信の手段として大きな可能性を秘めています。これらのツールを有効に活用することが、突破口になると考えます。

また、同窓会の活動が同窓生にとって魅力的かつ有益であり、「参加してみたい」「協力したい」と思えるような内容であることも重要です。特に若い同窓生や在学生との接点を意識した企画を通じて、早い段階から同窓会の存在を認識してもらい、母校とのつながりを自覚していただくことが求められます。そのためにも、同窓生である教職員（特に教員）の皆様の尽力が多いに期待されます。

医療学部会は発足して間もないため、天理大学ふるさと会が築いてきた90年の歴史を踏まえ、その土台の上に立脚した活動を模索してまいります。皆様の積極的なご参加とご理解、ご協力、そしてご意見・ご助言をお願い申し上げます。

<追伸> 右上のQRコードより「天理大学ふるさと会 医療学部会」のページにアクセスいただけます。『!お知らせ』欄を随時更新しておりますので、ぜひご覧ください。

天理大学創立100周年医療学部記念講演会の開催

「58年の歩みを胸に、再び天理に集う」

天理大学 医療学部長 小松 方(医技校23期)

天理大学は、2025年に創立100周年を迎えます。この節目を記念し、医療学部では「**天理大学創立100周年 医療学部記念講演会**」を開催いたします。本講演会は、天理大学ふるさと会医療学部会(旧・天理看護学院、天理医学技術学校、天理医療大学、および天理大学の同窓会組織)との共催により企画されました。

開催趣旨

天理の看護学教育と臨床検査学教育は、1967年に天理高等看護学院・天理衛生検査技師学校として始まり、天理医療大学を経て、2023年に天理大学医療学部へと発展してきました。その歩みは58年に及び、「天理スピリッツ」と呼ばれる精神のもとで多くの医療人を社会に送り出してきました。

しかし、専門学校時代の閉校に加え、新型コロナウイルス感染症の流行により、同窓会の開催が長く途絶えていました。このたびの記念講演会は、久しぶりに天理で学んだ仲間が一堂に会する貴重な機会です。看護師・臨床検査技師として全国で活躍する卒業生が再び集い、母校の歴史を振り返りながら、天理の卒業生であることの誇りと結束を新たにするといたします。

開催概要

日 時:2026年3月14日(土)10時から

会 場:天理大学 9号棟「ふるさと会館」

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

※参加人数に応じて天理大学2号棟22A教室を併用予定

主 催:天理大学医療学部

共 催:天理大学ふるさと会 医療学部会

内 容:各時代でご指導くださった先生方をお招きし、歴史を振り返るとともに未来の展望についてご講演いただく予定です(下記参照)。

また、終了後には天理大学「心光館」(会場から徒歩2分)にてケータリングによる立食懇親会(会費制)を開催し、世代を超えた交流と親睦を深める機会といたします。

結びに

本記念講演会は、創立100周年という節目を祝い、58年にわたる看護師・臨床検査技師教育の歩みを共有するとともに、再び同窓生が天理に集い結束を固める大切な機会です。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

天理大学創立100周年医療学部記念講演会 内容

1. 記念講演会オープニングセレモニー(10分程度の上映ビデオ、学院、医技校、医療大)
2. 開会の挨拶 天理大学医療学部長 小松 方
3. 来賓挨拶 天理大学学長 永尾比奈夫
4. 記念講演
司会進行:天理大学医療学部看護学科主任 江南宣子、同 臨床検査学科主任 畑中徳子
(1)天理看護学院の歴史と天理看護教育への期待 (共催:天理看護学院同窓会)
講師:大田容子(元天理看護学院教務主任、天理医療大学教授、天理大学教授、現 天理大学医療学部メンター)
(2)天理医学技術学校の歴史と天理臨床検査技師教育への期待(共催:天理医学技術学校同窓会)
講師:市村輝義(元天理医学技術学校副校長、関西医療大学教授、現 天理大学ふるさと会副会長兼医療学部会会長)
(3)天理医療大学開設と天理大学への合併(共催:天理医療大学同窓会)
講師:屋宜譜美子(元天理医療大学看護学科長・副学長、天理大学副学長、現 学校法人天理大学理事)
(4)天理大学医療学部のこれから
講師:小松 方(天理大学医療学部長)
5. 閉会の挨拶

天理大学創立100周年記念「医療学部講演会」(10:00~12:00)終了後、**同会場にて引き続き「2026年度医療学部会 総会」**を開催いたします。総会では、事業・会計報告、事業計画・予算審議、役員改選などを予定しております。その後、心光会館(学生食堂)へ移動し、懇親会(13:00~14:40/会費:5,000円)を開催いたします。

新型コロナウイルス感染症(感染期間:2019年12月~2023年5月)の終息から約2年半が経過しました。この間、人との交流がほとんどできず、同期会(クラス会)や同窓会の開催も困難な状況が続いていました。しかし、ようやくその制約もなくなり、自由に行動できるようになりました。

この機会に、同期やご友人と再会しませんか? ぜひ、**LINE・メール・電話**などで連絡を取り合い、天理に集まりましょう。久しぶりに近況を報告し合い、学生時代の思い出を語り合う場として、情報交換の機会をぜひご活用ください。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

(文責 市村輝義)

天理大学創立100周年 医療学部記念講演会

看護・臨床検査

日時: 2026年3月14日(土) 10:00
会場: 天理大学9号棟「ふるさと会館」

58年の歴史を胸に、再び天理に集う

天理における看護師教育と臨床検査技師教育は、1967年に天理高等看護学院・天理衛生検査技師学校として始まり、天理医療大学を経て、2023年に天理大学医療学部へと発展してきました。この歩みは半世紀を超える58年に及び、「天理スピリッツ」を礎に、多くの看護師・臨床検査技師を社会に送り出してきました。今回の記念講演会は、久しぶりに天理で学んだ仲間が一堂に会する機会です。全国で活躍する卒業生が母校に集い、その歴史を振り返り、天理の卒業生である誇りと絆を新たに深める場といたします。






主催: 天理大学医療学部
共催: 天理大学ふるさと会医療学部会
天理看護学院・天理医学技術学校・天理医療大学同窓会

終了後、医療学部会総会、引き続き天理大学心光館で交流会(会費制:5,000円)を行います。



同窓会ホームページ

「憩の家」で各職種が果たしてきた役割

看護部

天理よろづ相談所病院 看護部
副看護部長 吉川 圭(第1看護12期)



私たち天理よろづ相談所病院「憩の家」の看護師は、「対象となる人々の幸せをめざした看護」「心身ともに安らぐ看護」を大切にしています。尊重の心で寄り添い、安全に裏付けられた看護の技を提供し、そして笑顔と親切を忘れない——この思いを胸に、日々患者さんやご家族と向き合っています。そうした「憩の家」看護師を中心とした、新たな取り組みについてご紹介します。

「憩の家」は、年間約15,000人が入院される急性期病院です。患者さんの多くは、内科的治療や手術を受け、回復して退院されます。一方で、入院中に急な病状悪化をきたし、重篤な状態に陥るケースもあります。そうした際には院内の医師や看護師等が緊急招集され救命処置を行う「院内ハリーコールシステム」が機能しています。

しかし、急性期医療で最も大切なのは重篤状態に至る前の兆候に気づき、早期に対応することです。病状悪化を未然に防ぐことができれば、重大な合併症を回避し、救命率も高まります。そのため当院では、2024年10月に「院内迅速対応システム(Rapid Response System:RRS)」を導入しました。

RRSは、急変リスクが高い患者さんを早期に発見し対応する仕組みです。対象患者さんが応援要請基準に該当した場合、まず主治医や当番医に報告しますが、不在や対応困難な場合には「院内迅速対応チーム(Rapid Response Team:RRT)」へ応援要請します。RRTは、救急診療科・循環器内科・呼吸器内科・総合内科の医師、そして救急や集中治療に熟練した看護師で構成され、要請があればRRT看護師が現場へ駆けつけます。

RRT看護師は、重症患者の看護経験と専門的な研修を受けたプロフェSSIONナルです。現場に到着すると病棟看護師と協力して患者さんを観察し、何が起きているのかアセスメントします。医師の介入が必要な場合はRRT

医師を招集し、看護の技で安定化が可能な場合は身体的ケアや医療機器の調整を行い、状態の改善を図ります。

今年1月から6月の半年間で、RRSを通じたRRT看護師の介入は90件ありました。ある病棟看護師からは、「主治医が手術中で来れずどうすればよいのか困っている時に、すぐに駆けつけて一緒に考え対応してもらえて助かった」と感謝の言葉をもらいました。こうした取り組みは命を守ることに直結するだけでなく、病棟看護師とRRT看護師が共にアセスメントを行うことで、知識や技術を共有し合う機会となっています。その積み重ねは、患者さんの安全確保に加え、病棟全体のスキルアップにも直結しており、看護師の成長を支える仕組みでもあるのです。

「憩の家」は、奈良県東和医療圏を担う急性期病院として、またおちばに帰ってこられるようばくの方々を含め、地域の皆さまに安心してご利用いただける病院であり続けたいと考えています。これからも「尊重・安全・笑顔」の看護を大切にしながら、RRSをはじめとする様々な取り組みを通じて、患者さんやご家族に「ここでよかった」と思ってもらえる看護を実践してまいります。



臨床検査部

(検体検査部門)

天理よろづ相談所病院 臨床検査部
副技師長 下村 大樹(医技校26期)

検体検査部門では、2025年10月現在、副技師長1名、主任3名、リーダー8名を含む計42名のスタッフが協力して業務にあたっています。日々の検体検査に加え、外来や病棟での採血業務(写真1)も行っており、さらに栄養サポートチーム、感染対策チーム、糖尿病療養指導、治験コーディネーター、医学研究所での検査業務、超音波検査への派遣など、幅広い分野で活動しています。

2024年1月には、生化学・免疫検査の測定装置と検体検査の自動化システム(開栓・分注・搬送・閉栓・回収・仕分け)を再編成しました(写真2)。搬送ラインには7台の自動分析装置を接続し、検体の投入から分注、分析、閉栓、回収までを一括で行える体制を整えました(写真3)。これにより、スタッフの動きの負担が減り、業務の効率も大きく向上しています。

学術活動にも力を入れており、先輩方が築いてきた伝統を受け継ぎながら、学会発表などを通じて積極的に情報を発信しています。今年は、永井主任が日本検査血液学会の学術賞を、余村リーダーが日本医療検査科学会の優秀演題賞を受賞しました。AI技術を活用した検討も進めていますが、なにより「臨床に貢献する」という気持ちを大切にしながら、専門性の向上と知識の共有に取り組んでいます。

また、天理大学医療学部臨床検査学科の学生さんの臨地実習(3回生)ならびに卒業研究(4回生)も受け入れており、かつて自分が教わったご恩に少しでもお返しできるよう、丁寧な指導を心がけています。

厳しい医療環境が続く中ではありますが、検体検査の必要性ならびに重要性の一層の向上を図るべく、これからも努力を重ねてまいります。



写真1. 外来診療棟 採血台

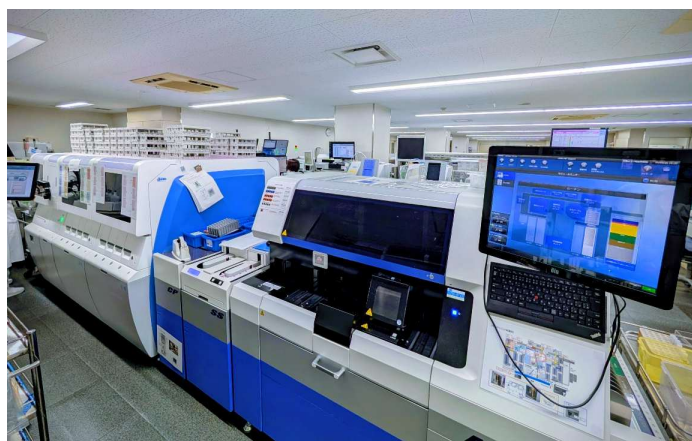


写真2. 新たに導入した分析前工程統合・自動化管理モジュール



写真3. 新たに導入した検体搬送ラインと生化学・免疫測定装置

臨床検査部 (生理検査部門)

天理よろづ相談所病院 臨床検査部
副技師長 桑野 和代(医技校20期)

はじめに、私たちは今も変わらず各先輩方に倣って「憩の家」の設立理念に基づき「笑顔と親切」をモットーに患者さまの思いに寄り添う医療の提供を心がけております。それでは、憩の家 臨床検査部 生体検査部門 の今を紹介させていただきます。

現在の生体検査部門は、35名で運営しています。私たちは超音波検査・心電図検査・脳波神経機能検査・呼吸機能検査など専門分野の検査を外来棟と入院棟の検査室および病室や診療科に訪室で行っています。各棟の検査室はどちらもワンフロアで全体が見渡せるようになっており、各人が全体を見渡し臨機応変に業務を遂行し、電話対応はフロアにいるメンバー全員で行うよう、心がけています。限られた人数で運営しているため、日常業務と並行して複数分野の検査が担えるように研修も進めています。

心電図検査室は外来棟診療科に隣接しており、患者異変時には各ベッド横のナースコールで看護師がかけつけてくださる運営になっています。また、外来棟で救急事例発生時には院内コールとともに現場に心電計を準備してかけつけ救命処置活動チームの一員として直ちに心電図検査ができるように待機しています。

次に、他部署(手術室・心カテ室・RI室・耳鼻科・乳腺外科・白川分院など)への出向検査、チーム医療、にも携わっています。臨床の現場では、「笑顔と親切」に基づいた患者接遇はもちろん、高度先進医療提供のため多岐にわたる依頼内容に応えること、多方面のチーム医療に参画すること、が必要

とされています。どの分野においても携わっている多くのカンファレンスに参加し、臨床との情報共有とともに信頼関係を築き、コミュニケーション力をふくめ、日々、研鑽に励んでおります。

さらに、「医師の働き方改革」をトリガーとして「診療の補助行為」の一部限定解除による法改正が成立し、2021年10月から新たに10行為の業務が臨床検査技師に認められました。厚生労働大臣指定の研修を全員受講し、早速、検査室の従来の枠を超えて診療支援に取り組んでいます。そして、2025年4月、憩の家は「地域医療支援病院」として施設認定を受けました。これまで以上に地域に根ざした医療機関として「断らない病院」の理念のもと、地域医療へのさらなる貢献に私たちも努めてまいります。これまでの先輩方が築き上げてこられた良き伝統を継承しつつ、信頼され愛される検査室を目指して邁進してまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



生体検査部門の検査待合所

臨床工学部

天理よろづ相談所病院 臨床工学部
前技師長 小林 靖雄(医技校18期)

1. 憩の家の臨床工学技士の変遷

憩の家では、1987年に臨床工学技士が誕生した当初に業務を担当していた臨床検査技師が30名以上臨床工学技士資格を取得しました。その後、1988年に臨床病理部内にCE部門ができ、そして2019年に臨床工学部として独立して現在に至っています。

2. 業務内容と役割

透析領域では血液透析装置や水質管理を徹底し、患者の安定した治療を支えています。集中治療室では人工呼吸器やECMO、血液浄化装置を管理し、重症患者の救命に直結する役割を担っています。手術室では人工心肺装置を用いた体外循環業務をはじめ、多種多様な医療機器の操作と管理を行い、安全な手術環境を構築しています。さらに近年は腹腔鏡手術においてスコープオペレーターとして術野の確保を支援し、清潔介助業務にも従事して手術の進行を支えるなど、チームの一員として重要な役割を果たしています。また、手術用ロボット支援下手術においても機器の準備や管理を担当し、精密で低侵襲な手術を支えています。

内視鏡センターでは検査や治療に用いる装置の準備・点検を行い、安全で正確な診断と低侵襲治療を支援しています。心臓カテーテル検査室では検査機器や補助循環装置の運用を担い、緊急時にも即応可能な体制を整えています。不整脈治療のアブレーションではマッピングシステムやデバイスアブレーション装置を操作し、精度と安全性

を高めています。さらにペースメーカー、ICD、CRTなどの植込み型に関しても、植込み時のサポートから術後管理、遠隔モニタリングまで幅広く対応しています。

また、ハイブリッド手術室で行われる最新の低侵襲治療にも深く関与しています。経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVR)では関連機器の準備・操作を担い、高齢患者に安全な治療を提供しています。さらに僧帽弁閉鎖不全症に対するMitraClip治療や、左心耳閉鎖術(Watchman)といった新しい治療でも機器管理を担当し、循環器分野の最先端医療を支えています。

また、臨床工学技士は医療安全活動にも積極的に、定期点検や職員教育を通じて事故防止を推進しています。さらに奈良県臨床工学技士会や日本臨床工学会、その他の専門学会の運営に参加し、研究発表や教育活動を通じて地域医療の発展や後進育成にも寄与しています。

このように憩の家における臨床工学技士は、院内の多くの臨床現場で検査や治療に昼夜を問わず貢献しており、さらに医療安全や学術的貢献に至るまで幅広く関与し、医師・看護師ら多職種と協働しながら患者中心の医療を支えています。進化する医療の中で、その専門性は今後さらに重要性を増し、活躍する範囲が拡大すると思われます。

現在の仕事内容や頑張っていること

天理よろづ相談所病院 東5病棟
前田 倫花(天理大学73期)

看護師1年目の私は、先輩方の指導のもと、バイタルサインの測定や点滴の準備、清拭・食事介助、電子カルテへの記録入力など、日々の基本的な業務に丁寧に取り組んでいます。まだ慣れない業務も多く、毎日が緊張と学びの連続ですが、現場でしか得られない気づきや学びを通して、少しずつ成長を実感しています。

現在の目標は、基礎的な看護技術や知識を確実に身につけることはもちろん、患者さんの小さな変化にも気づける観察力を高めることです。教科書には載っていない、患者さんの表情や仕草、何気ない一言などから体調の変化や心の不安を読み取る力は、実際の看護の現場でこそ養われるものだと感じています。患者さん一人ひとりに寄り添い、"今この瞬間に何を必要としているのか"を感じ取れる看護師になりたいと日々努力しています。

そんなある日、私は手術後の患者さんの全身清拭を担当する機会がありました。禁忌肢位や傷の状態への配慮を慎重に行っていたところ、想定以上に時間がかかってしまい、先輩から「丁寧すぎるのも患者さんの負担になる」と厳しく指摘されました。患者さんの安全を第一に考えていたつもりが、結果的に身体的な負担を増やしてしまったかもしれないという反省とともに、自分の未熟さを痛感し、落ち込んでしまいました。その時、清拭を終えた患者さんが私に向かって「丁寧にしてくれて嬉しかったよ。ありがとう」と微笑んで声をかけてくださいました。その一言に心が温かくなり、涙が出そうになりました。自分が行ったケアが、患者さんの安心感や快適さにつながっていたことを知り、看護師としての原点を思い出させてもらったような気持ちになりました。

先輩の指導は厳しいこともありますが、それは患者さんの安全や効率的なケアを実現するために必要な視点だと今では理解しています。限られた時間と人手の中で、いかに質の高い看護を提供するか。そのためには丁寧さと効率のバランスを考える力が必要です。ただ時間をかけるのではなく、「その人にとっての最善」を常に考えることが、本当の意味での「丁寧さ」であると気づきました。

患者さんの言葉は、私にとって大きな励みであり、「自分の看護には意味がある」と確信できた瞬間でした。慣れない環境で戸惑うことも多く、心身ともに疲労を感じる日もありますが、この経験を通して、看護の奥深さとやりがいを改めて実感しています。

今後も一つひとつの経験を大切にしながら、技術や知識を磨き、患者さんにとって安心できる存在になれるよう努力していきたいと思っています。そして、信頼される看護師を目指して、日々成長し続けたいと考えています。

臨床検査技師として働きはじめて

天理よろづ相談所病院 臨床検査部
奥野 杏菜(天理大学73期)



この春から臨床検査技師として働き始めました。この度、天理大学ふるさと会医療学部会報『憩の仲間』への執筆機会をいただきました。拙い文章ではありますが、指名していただきましたので、臨床検査技師として働き始めて感じたことを綴らせていただきます。

天理よろづ相談所病院では、さまざまな検査や症例に触れることができ、日々新しい発見があります。現在は新人ローテーション中で、1年をかけていろいろな部署を回りながら学んでいます。まだ社会人1年目ということもあり、緊張と不安を抱えながらの毎日ですが、同時に新しい経験ができる楽しさも感じています。

現時点で回った部署の中で特に印象に残っているのは、心電図検査と採血業務です。これらの業務では直接患者さんと関わる機会が多く、「ありがとう」「頑張ってるね」などと声をかけていただくことがあり、その言葉にとっても励まされています。患者さんからいただく一言が、自分の仕事にやりがいを感じさせてくれると同時に、「もっと技術を高めたい」「もっと信頼されるようになりたい」と前向きな気持ちにさせてくれます。

一方で、大きな病院ならではの大変さもあります。患者さんの数、検体の数はとても多く、さらに症例也多岐にわたるため、正直に言えば頭がいっぱいいっぱいになることもあります。業務のスピードや正確さに追いつけず、まだまだ勉強不足を痛感する日々です。学生時代に学んだ知識だけでは到底足りず、現場で学び続けることの大切さを身にしみて感じています。

ただ、学生の時と大きく違うのは、課題や試験のために急かされて勉強するのではなく、自分のペースで学べることです。分からないことや疑問に思ったことを、自分で調べたり先輩方に聞いたりしながら学ぶことはとても楽しく、知識や経験が一つ一つ身についていく実感があります。これからも、自ら積極的に学ぶ姿勢を大切にしたいと思います。

将来の目標は、患者さんに安心と信頼を持てただけの臨床検査技師になることです。そのためには、検査の精度や技術を磨くことはもちろん、患者さん一人ひとりに寄り添う気持ちを忘れないことが大切だと考えています。そして病院の一員として、検査を通じてチーム医療に貢献できる臨床検査技師になれるよう、努力を続けていきたいです。まだまだ未熟で学ぶことばかりですが、日々の経験を糧に、少しずつ成長していきたいと思っています。これからも新しい発見や出会いを大切にしながら、一歩ずつ前進していきます。